

鹿児島県総合教育センター研究提携校

令和7年度鹿児島県立松陽高等学校研究公開

【研究主題】

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して

—思考力・判断力・表現力を身に付ける取組み—



目 次

頁

1	本日の日程等・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	鹿児島県総合教育センター研究提携校 令和7年度鹿児島県立松陽高等学校研究公開研究報告・・	2
3	各教科指導案（S S T P）	
(1)	国語・・・・・・・・・・・・・・・・	23
(2)	地歴・公民・・・・・・・・・・・・・・・・	25
(3)	数学・・・・・・・・・・・・・・・・	27
(4)	理科・・・・・・・・・・・・・・・・	29
(5)	外国語・・・・・・・・・・・・・・・・	31



令和7年11月7日（金）
鹿児島県立松陽高等学校

1 本日の日程等

(1) 全 体 会 (13:15~14:15)

- ① 開会の挨拶（学校長，県総合教育センター所長）
- ② 日程説明・諸連絡
- ③ 研究発表
- ④ （該当教科）研究公開授業・分科会についての説明

移 動

(2) 研究公開授業 (14:30~15:20)

教 科	科 目	学 級	授業場所	単元・授業内容	授業者
国 語	論理国語	2年1組 (普通科)	2年1組	消費されるスポーツ	浦 上 美 香
地歴・公民	歴史総合	1年8組 (美術科)	1年8組	世界恐慌	和 田 淳 義
数 学	数学Ⅱ	2年5組 (普通科)	2年5組	微分法と積分法	大 西 真 之
理 科	生物	2年4組 (普通科)	2年4組	遺伝子の変化と 進化のしくみ	池 田 大 悟
外国語	英語コミュニケーションⅢ	3年3組 (普通科)	3年3組	Lesson13 Crowdfunding	福 田 智 行

移 動

(3) 分 科 会 (15:30~16:30)

教 科	分科会場所	鹿児島県総合教育センター共同研究者		
国 語	地学室	教科教育研修課研究主事	勝 田 友 美	
地歴・公民	講義室4	教科教育研修課研究主事	米 倉 秀 和	
数 学	大会議室	教科教育研修課研究主事	川 原 学	
理 科	講義室1	教科教育研修課高校教育研修係長	東 寛 久	
		教科教育研修課研究主事	野 間 口 元	
		教科教育研修課研究主事	田 淵 由 理	
外国語	LL教室	教科教育研修課研究主事	内 谷 貴 彦	

(4) アンケート回答 (16:30~16:40)

2 鹿児島県総合教育センター研究提携校

令和7年度鹿児島県立松陽高等学校研究公開 研究報告

I 研究主題

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して
ー思考力・判断力・表現力を身に付ける取組みー

II 研究主題設定の理由と概要

本校では、令和6年度から3か年計画で、教育センターと連携した研究を進めている。研究の主題は「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」であり、学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して授業改善を図るものである。

この主題の背景には、令和3年1月の中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～』がある。この答申では、「個別最適な学び」が「孤立した学び」とならないよう、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を相互に関連づけ、一体的に充実させることの重要性が示されている。本校もこの趣旨を踏まえ、3年間を通して両者の一体的な充実を図ることを研究の柱に据えた。

III 令和6年度の研究の状況

令和6年度（1年目）は、三つの資質・能力（知識・技能／思考・判断・表現／学びに向かう力）のうち、「知識・技能の習得」に焦点を当て、副題を「知識・技能を身に付け活用する力を高める取組み」とした。前研究（令和3～5年度）の「生徒に身に付けさせたい資質・能力を教科等横断的に育成する研究 ー目標・指導・評価の一体化を実現する取組を通してー」で構築した「学びのグランドデザイン」や「パフォーマンス課題」、「ルーブリックを用いた定点評価」などを引き継ぎながら、知識・技能の定着を中心に研究を進めた。

具体的には、Googleフォームを活用したアンケートにより、生徒が自ら学習実態を振り返り、学習目標を設定したうえで学びに臨む仕組みを整えた。その結果、教員は生徒の実態を可視化して指導や評価に反映できるようになり、学習意欲や学びに向かう姿勢の改善につながった。

IV 今年度の研究

令和7年度（2年目）は、これらの成果を踏まえ、三つの資質・能力のうち「思考力・判断力・表現力」の育成に重点を置く。副題を「思考力・判断力・表現力を身に付ける取組み」とし、1年目に培った知識・技能を活用しながら、より深い学びへと発展させることを目指している。

また、本校独自の育成指標である「松陽プライド～9つの力～（SP9）」の中の「分析力・見聞力・創造力・発信力」を、思考力・判断力・表現力に対応する要素として位置づけ、生徒自身がその伸長を自覚できる取組を推進している。

なお、研究に当たり、教育センターが提唱する「学びの選択（学習者が選択する『学びの選択』の五つの視点）（令和5年度）」（図1）を指導法の共通の枠組みとして活用している。

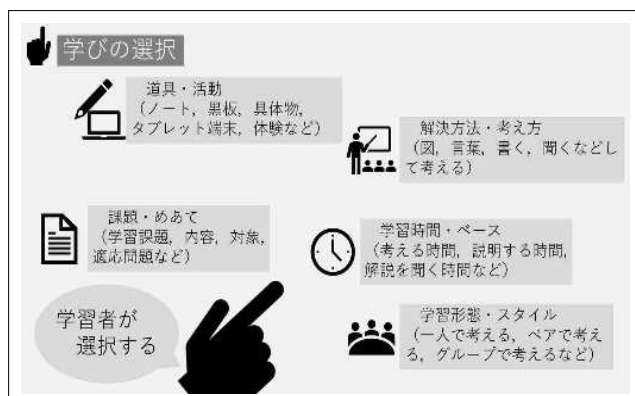


図1 「学習者が選択する『学びの選択』の五つの視点」

県総合教育センター研究紀要 第128号（令和6年3月）

V 研究の構想

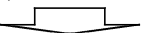
1 研究期間

令和6年度～令和8年度（3年間）

2 3年間の研究計画

年度	主な内容
令和6年度	・個別最適な学びと協働的な学びの理解と研究 ・知識・技能を身に付け活用する力を高める指導方法の工夫 ・研究内容に基づいた授業の公開，実践事例や研究内容の発表
令和7年度	・個別最適な学びと協働的な学びの理解と研究 ・思考力・判断力・表現力を身に付ける指導方法の工夫 ・研究内容に基づいた授業の公開，実践事例や研究内容の発表
令和8年度	・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指す授業改善 ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実により生徒が身に付けた資質・能力の検証 ・研究内容に基づいた授業の公開，実践事例や研究内容の発表・研究成果の検証，まとめ

3 今年度の研究の方向性

①個別最適な学びと協働的な学びの理解と研究  ・学習指導要領の研究(科目の目標，性質等の再確認・研究) ・「個別最適な学び」「協働的な学び」に関する研究	②思考力・判断力・表現力を身に付ける指導方法の工夫  ・相互授業参観（同教科・他教科・他学年）の実施 SSTP (Shoyo Simple Teaching Plan) の活用 ・思考力・判断力・表現力を身に付けることを意識した授業形態・評価方法の研究 ルーブリック評価の作成 ・「学びの選択（鹿児島県総合教育センターが調査研究において作成した「学習者が選択する『学びの選択』の五つの視点」より）」を活用した指導方法の研究	③研究内容に基づいた授業の公開，実践事例や研究内容の発表  ・自己評価アンケート（生徒対象）の実施 ・アンケート回答結果の蓄積システムの構築 ・職員アンケートの実施 ・アンケート分析 ・Classiによる，実践事例や研究内容の情報共有
---	---	---

4 研究の体制

図2のように，校務分掌上では教務部の研究開発係が中心となる。係は，チーフと各教科1人（国語，地歴・公民，数学，理科，外国語）の6人で構成されており，体制としては，研究開発係が，教務係やキャリア・ガイダンス部（CG部）と連携をとりながら研究を進める。

また本研究は，本校独自のスクールポリシーであるSP9（VI1参照）を基盤に進めるものであるため，必要に応じてスクールポリシー委員会における検討も実施する。

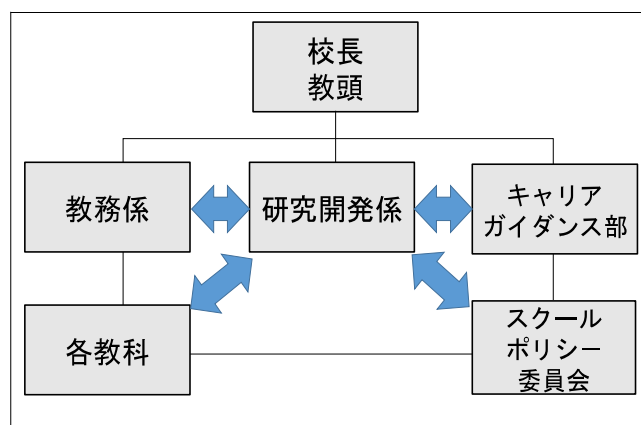


図2 校内の研究体制

Ⅵ 昨年度までの主な取組の継続

1 目標の共有（「SP9」の設定）

令和2年度に、「社会に開かれた教育課程」と学校教育目標達成のために新設したカリマネ策定委員会を中心に、本校生徒に身に付けさせたい資質・能力を設定し「SP9（松陽プライド～9つの力～）」と名付けた。令和3年度には生徒・職員間で目標の共有を図るため、新たに「松陽高校グランドデザイン」（図3）やポスター（図4）を作成し、以降、授業だけでなく行事を含めた学校教育活動全般でSP9の意識付けに努めている。



図3 松陽高校グランドデザイン



図4 SP9 ポスター

2 学びのグランドデザインの作成

令和3年度に「学びのグランドデザイン」（次頁資料1）を作成し、学校教育活動全体におけるSP9の対応を示し、授業や各行事を通してどの力を身に付ける機会とするのか明確化した。

「学びのグランドデザイン」は年度初めに教室掲示、各行事前にも都度教室や廊下の掲示板にプリント（図5）を掲示することで、年間を通してSP9を意識できるよう取り組んでいる。

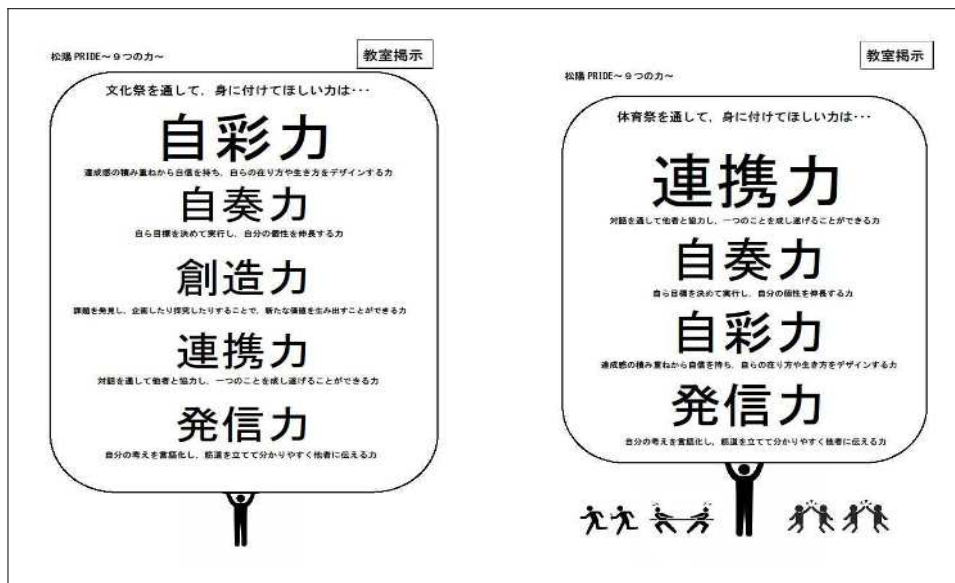


図5 SP9 教室等掲示プリント（文化祭・体育祭の例）

令和 7 年度 鹿児島県立松陽高等学校 学びのグランドデザイン（決定版）

★ 学校教育目標

創造性豊かで実践力のある社会に有為な人材の育成



★ 松陽プライド～9つの力～

校訓	育てたい生徒像	資質・能力	定義
向学	自ら主体的に学ぶ生徒	①自奏力	自ら目標を決めて実行し、自分の個性を伸長する力
		②基礎力	基礎的な知識や技能を理解・習得するために継続して努力する力
		③分析力	必要な情報を収集し、適切に判断・処理できる力
高雅	創造性豊かな生徒	④見聞力	多様な価値観を尊重し、世の中の情報や多様な意見を受け入れ、学ぶことができる力
		⑤創造力	課題を発見し、企画したり探究したりすることで、新たな価値を生み出すことができる力
		⑥自彩力	達成感の積み重ねから自信をもち、自らの在り方や生き方をデザインする力
貢献	社会に貢献できる生徒	⑦連携力	対話を通して他者と協力し、一つのことを成し遂げることができる力
		⑧発信力	自分の考えを言語化し、筋道を立てて分かりやすく他者に伝える力
		⑨寄与力	社会に関与する姿勢をもち、学校や地域の取り組みに積極的に貢献することができる力

★ 各教科で育成を目指す資質・能力（◎最も育成したい力 ○育成したい力）

各教科	①自奏力	②基礎力	③分析力	④見聞力	⑤創造力	⑥自彩力	⑦連携力	⑧発信力	⑨寄与力
国語		○	○	◎	○			○	
地歴公民		◎	○		○		○	○	
数学	○	◎	○		○	○			
理科		○	◎		○		○	○	
英語	○	○		◎	○		○	○	
保健体育	○				○	○	◎		○
家庭		○		○	○	◎			○
書道	○	○		○	◎	○			
美術					◎	○	○	○	○
音楽		○		○	◎		○		
情報			○	○			○	○	◎
総探	○		○		○			○	◎

★ 主な特別活動で育成を目指す資質・能力（◎最も育成したい力 ○育成したい力）

行事	①自奏力	②基礎力	③分析力	④見聞力	⑤創造力	⑥自彩力	⑦連携力	⑧発信力	⑨寄与力
遠足				◎			○		
松伊戦						○	◎	○	
生徒総会							◎	○	○
文化祭	○				○	◎	○	○	
クラスマッチ						○	◎		○
体育祭	○					○	◎	○	
遠行	○					○			◎
修学旅行	○		○	◎	○		○		○
各種講演会	◎			○		○			
松陽芸術祭				◎		○			○
ボランティア活動				○			○		◎
全校朝礼				◎					○
薬物乱用防止教室	○		◎						
救急救命		◎	○						
朝読書		○	○	◎					
ビブリオバトル			○	○	○		○	◎	

3 S S T Pの目的の共有

令和2年度に相互授業参観用として開発された松陽版簡易指導案＝S S T P（Shoyo Simple Teaching Plan）（表1，2）について，相互授業参観や研究授業での活用を年度初めに促した。

相互授業参観が十分に行われていない現状があるため，指導・評価方法のさらなる改善に向けて，相互授業参観の機会の確保やそれに代わる取り組みを含め，S S T Pの今後の活用について工夫が必要である。

表1 S S T P（単元デザイン）

記入方法【研究授業用のS S T P】		S S T P（Shoyo Simple Teaching Plan）		単元デザイン	
教科・科目		学科・コース			
単元名					
単元目標	【単元目標】学習指導要領の「学習目標」の記述を参考に記入する。				
課題	【課題】「パフォーマンス課題」を設定する。				
単元の中心となる問い	【単元の中心となる問い】「本質的な問い」を立てる。				
評価規準（R段階）	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	【単元の評価規準】「学習指導要領」や「指導要領」の一体化のための単元評価に際する参考資料」を参考に3観点で評価規準を作成する。その際、SP9と関連付ける。 評価規準はR段階（外科学的知識である知識）とし、その下にSP9が、関連していない場合は記入する。				
評価規準・評価方法	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	【評価場面】定期考査、単元テスト、パフォーマンス課題、言語活動などを記入する。				
単元の指導計画	学習活動		指導と評価の観点		
			知	思	表
			SP9		
	1		【指導と評価の観点】3観点のうち重点知識にのみ付ける。その際、単元の中心となる評価（能力の評価）に、必ず付ける。また、中心となるSP9を記入する。SP9は【評価規準】のどこと関連付ける。		
	2				
	3				
	4		①・・・形成性評価（指導の改善に活かす評価） ②・・・評価性評価（指導の改善に活かすとともに評価を高めるための評価、無時間記録する必要はない。）		
5					
6					
7					

表2 S S T P（授業デザイン）

S S T P（Shoyo Simple Teaching Plan）				授業デザイン
日時		指導者		
学級		場所		
単元名	【単元名】・【課題】 単元デザインに記述した内容と同じ。			
課題	【課題】			
本時の案	過程	主な学習活動	資質・能力の育成の工夫	SP9
	導入（分）	【資質・能力の育成の工夫】評価方法も含め記入する。 ①行動の観察・支援の記録 ②行動の観察・支援の記録		
	展開（分）	関連するSP9を記入する。 （中心となるものだけよい。）		
	まとめ（分）			

4 パフォーマンス課題の研究

本校では，パフォーマンス課題を「複数の知識やスキルを総合的に使いこなすことを求めるような複雑な課題」と捉え，①実生活や実社会を想定すること，②複数の既習知識やSP9を組み合わせ解決に向かうような課題を設定すること，③「本質的な問い」を学習者自身が問わざるをえないようなシナリオを設定すること，を意識して考案，実施することとしている。なお，「本質的な問い」とは，「答えが一つではない問い・既習知識やスキルを総合的に活用し，解決に向かう問い・思考を誘発し，知的に興奮させる問い・さらなる問いを生み，探究心を育む問い・様々な場面や文脈で活用できる問い・様々な情報を活用し，解決に向かう問い」と捉えている。

パフォーマンス課題の形態としては，レポートや展示物の作成，スピーチやプレゼンテーションでの発表，実験の実施など，様々なものが考えられるが，パフォーマンス課題の評価においては，知識・技能と思考力・判断力・表現力とを総合的に把握し評価することが重要である。

これらの点を意識しつつ，今後も各教科パフォーマンス課題・評価の研究に取り組んでいく。

5 ルーブリック評価と定評評価

ルーブリックとは、成功の度合いを示す数レベルの尺度と、各レベルに対応するパフォーマンスの特徴からなる評価表等で、生徒の学習到達状況の絶対評価を行うためのものさしである。今年度は、研究主題に従い思考力・判断力・表現力に関する3段階（A：十分満足できる状況、B：おおむね満足できる状況、C：努力を要する状況）のルーブリック評価（資料2）を検討し各教科で作成した。

学習のねらいや身に付ける資質・能力を明らかにし、生徒と教師が評価を共有することで、生徒は見通しをもって活動に取り組むことができ、学習の成果の振り返りを次の学習の目標設定につなげることができる。また、教師側も自分の指導の振り返りを生徒一人一人の個別の対応につなげられ、特にC評価だった生徒への手立てを効果的に行うことができると考える。

各教科とも年間を通して活用できるルーブリック評価を用いた評価を行っている。学年末まで継続して行い、学習傾向や生徒たちの変容を見取することで、来年度の研究につなげていきたい。

資料2 ルーブリック評価

まず【身に付けていく資質・能力】を決める。
今年度の研究内容（思考力・判断力・表現力を身に付ける指導方法の工夫）にある、「思考力・判断力・表現力」の中で、特に身に付けさせていきたい力を具体的に設定する。

身に付けていく資質・能力

〇〇する力

	評価方法	評価する内容
1	テスト パフォーマンス課題 レポート 実験等	年間を通して学ぶ内容（「思考力・判断力・表現力」について）を記入
2		
3		
4		

ルーブリック評価

	A	B	C
ルーブリック	【評価する内容】【ルーブリック評価】のところは、学習指導要領、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」を参考にしてください。 「指導と評価の～」の「『思考・判断・表現』の評価について」の中に、「各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかを評価するものである。」「『思考・判断・表現』を評価するためには、教師は『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善をする中で、生徒が思考・判断・表現する場面を効果的に設計するなどした上で、指導・評価することが求められる。」とあります。 この点を意識し、【評価する内容】の設定、【ルーブリック評価】の作成をお願いします。		

Ⅶ 生徒の実態（令和７年度学校要覧より）

本校は特色ある学校として普通科の他に音楽科・美術科を有している（今年度の音楽科・美術科の生徒の割合は計24%）。音楽科・美術科の生徒たちの専門分野における諸活動はもちろん、加入率約80%を超える部活動生の活躍もめざましいものがある。また遠方からの通学生も多く、今年度は列車通学の割合は68%、通学時間が１時間以上の生徒の割合は24%である。

Ⅷ 研究の内容

１ 自己評価アンケート①（松陽プライド9つの力生徒アンケート（４月・６月・２月実施））

ＳＰ９の定着に関して「自己評価アンケート」をGoogleフォームにて実施している。項目の尺度は（１：自信がない ２：あまり自信がない ３：やや自信がある ４：自信がある）の４段階である。各行事毎のＳＰ９の掲示，ＳＨＲ等での教員からの呼びかけ，定期的なアンケートの実施をととして、生徒たちのＳＰ９への意識を高めたいと考えている。

資料３ ＳＰ９の力 生徒アンケート結果（Ｒ６．４月からＲ７．９月まで）

※ 全学年対象、ただしＲ7.2は１・２学年対象 単位（％）

① 自奏力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	2.7	1.9	2.2	2.9	1.8
あまり自信がない	30.6	36.1	29.3	32.8	32.9
やや自信がある	52.4	49.3	48.7	49.0	51.1
自信がある	14.4	12.8	19.9	15.2	14.2
自信がある合計	66.8	62.1	68.6	64.2	65.3

② 基礎力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	1.9	4.8	2.2	3.7	3.7
あまり自信がない	34.5	36.4	31.5	32.0	34.1
やや自信がある	49.5	47.1	50.0	49.7	47.6
自信がある	14.0	11.7	16.4	14.6	14.5
自信がある合計	63.5	58.8	66.4	64.3	62.1

③ 分析力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	2.4	1.9	2.4	2.7	2.7
あまり自信がない	27.3	29.4	25.3	29.3	27.5
やや自信がある	54.1	53.3	52.2	50.8	54.1
自信がある	16.2	15.4	20.2	17.2	15.7
自信がある合計	70.3	68.7	72.4	68.0	69.8

④ 見聞力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	1.4	1.6	1.3	1.8	1.3
あまり自信がない	16.6	17.7	12.9	14.6	15.2
やや自信がある	52.2	49.3	53.0	52.8	51.4
自信がある	29.8	31.4	32.8	30.9	32.2
自信がある合計	82.0	80.7	85.8	83.7	83.6

⑤ 創造力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	2.4	5.1	2.4	3.8	3.9
あまり自信がない	39.9	37.5	30.6	34.4	35.1
やや自信がある	44.3	43.3	46.0	45.2	45.3
自信がある	13.4	14.1	21.0	16.5	15.7
自信がある合計	57.7	57.4	67.0	61.7	61.0

⑥ 自彩力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	2.1	2.8	2.7	2.9	2.7
あまり自信がない	27.4	29.7	27.2	30.0	27.8
やや自信がある	49.5	47.8	43.8	47.1	47.5
自信がある	21.0	19.7	26.3	20.0	22.0
自信がある合計	70.5	67.5	70.1	67.1	69.5

⑦ 連携力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	3.0	3.0	1.9	2.8	2.4
あまり自信がない	17.5	17.4	18.0	17.2	16.9
やや自信がある	45.0	45.1	42.5	47.0	45.8
自信がある	34.5	34.5	37.6	33.0	34.9
自信がある合計	79.5	79.6	80.1	80.0	80.7

⑧ 発信力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	8.0	7.5	5.6	7.7	6.6
あまり自信がない	41.0	44.9	37.9	41.4	41.6
やや自信がある	39.1	37.5	40.6	39.4	39.3
自信がある	11.8	10.0	15.9	11.5	12.6
自信がある合計	50.9	47.5	56.5	50.9	51.9

⑨ 寄与力

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
自信がない	4.1	2.8	2.7	3.6	3.9
あまり自信がない	30.0	34.9	30.1	32.0	34.0
やや自信がある	49.8	48.0	48.4	47.4	45.0
自信がある	16.1	14.3	18.8	17.0	17.1
自信がある合計	65.9	62.3	67.2	64.4	62.1

【現時点で最も必要だと考える力】

※ R7.2は「R7年度に意識したい力」

	R6.4	R6.9	R7.2	R7.4	R7.9
①自奏力	14.0	12.0	12.4	12.8	12.5
②基礎力	18.6	18.6	21.5	17.9	17.8
③分析力	5.4	5.1	6.7	7.0	6.0
④見聞力	6.2	8.3	7.0	7.0	5.9
⑤創造力	6.8	9.6	7.8	6.8	7.5
⑥自彩力	8.5	8.0	10.8	8.2	10.4
⑦連携力	26.8	27.8	14.2	26.4	27.2
⑧発信力	10.6	8.1	15.1	10.6	10.0
⑨寄与力	3.2	2.6	4.6	3.2	2.7

前頁資料3は令和6年度4月から令和7年度9月までの結果比較である。

「⑦連携力」に関しては昨年度から一貫して約8割の生徒が「自信がある（自信がある＋やや自信がある合計）」と回答しており、学校生活における「連携力」の必要性和定着度が一致していると言える。「④見聞力」も同様に「自信がある」割合は8割以上と高いが、必要性はあまり感じていないという結果が出ている。

今年度の研究の柱である「思考力・判断力・表現力」と対応する「③分析力・④見聞力・⑤創造力・⑧発信力」に着目すると、「⑧発信力」に自信がある生徒は約5割に留まり、「発信力」に対する自信のなさが顕著である。このことについて、生徒の現状をふまえ、以下のとおり「自信がもてない理由」と「考えられる対策」について考察した。

生徒が「発信力」に自信をもてない理由

ア 正解志向の強さ

学校生活で「一つの正解」を求められる場面が多く、自分の意見の正誤に対する不安を抱きやすい状況があるのではないかな。

イ 発表における成功体験の不足

ペアワーク、グループワークの中で発表する機会があっても、自分の意見より人の意見を聞くことに重点を置き、自分の成功体験として認識しづらいのではないかな。

ウ 語彙力・論理的構成力の不足

頭の中に自己の考えがあっても、それを筋道立てて言語化する練習が不十分なのではないかな。

エ 評価の観点の不明確さ

何をもって良い発信なのか規準がはっきりせず、自己評価しづらいのではないかな。

オ 心理的ハードルの高さ

人前で話すことへの緊張や失敗経験から、発信をリスクと感じてしまうのではないかな。

生徒が「発信力」に自信をもつために考えられる対策

ア 小さな成功体験を積ませる

例) ペア→グループ→クラスへ段階的に発表の規模を広げ、経験を積ませる。

教師からの評価の前に、生徒同士「なるほど」「いいね」といった即時の肯定的なフィードバックを重ね、相互承認する機会を増やす。

イ 評価規準を明確にする

例) 評価規準を予め周知し、それを意識しながら発表し、自己評価しやすくする。

ウ 発表のモデルを提示する

例) 事前に「良い発表例」を示し、具体的にイメージできるようにする。

同じ問いに対する複数の回答例を提示し、多様な回答を受容できるようにする。

エ 語彙力・論理的構成力のサポートをする

例) 「結論→根拠→具体例→まとめ」の型をカードで提示したり、身近なテーマで「考える・言葉にする」練習をしたりする。

2 生徒の個人目標設定〈思考力・判断力・表現力の向上を目指して〉（1・2学期）

昨年度、各教科それぞれ知識・技能の習得を目指すための具体的な取り組みを挙げ、生徒が各自目標として設定することで、授業や自宅学習に取り組みやすいよう工夫した。今年度は同様の形式で、内容を思考力・判断力・表現力の向上を目指すものにして、1学期（GW前）と2学期（9月初旬体育祭後）に目標を設定させた。

資料4のとおり、各項目の選択の割合は1・2学期で大きな変化は見られないが、生徒がどのような項目を重視しているのか、どのようなことなら取り組みやすいと感じているのかは見えてくる。目標設定はあくまで各学期の全体的な取り組み方の目安と言えるため、単元毎の内容に則した目標については教員がその都度生徒に示して学習活動に取り組ませる必要がある。

資料4 各教科ごとの生徒個人の目標設定 調査結果

	(%)	
【国語】さまざまな事象について、言葉で思考し、判断し、表現しよう。	1学期	2学期
意味の分からない言葉に出会ったら、辞典などで調べる。	56.4	57.3
文章を読んでキーワードを見つけ、それに関連する言葉やテーマを調べる。	14.0	17.3
同じテーマについて異なる論点をもつ複数の文章を読み比べ、自分なりの考えをもつ。	13.4	11.4
本文と図表の関係を的確に読みとり、筆者の主張を理解する。	31.4	30.6
要約のこつをつかむため、長文を読み、自分で要約に挑戦してみる。	23.9	26.1
課題の自己採点をする時は解説を熟読し、正解と自分の解答を比較し、要点を理解するように努める。	29.1	27.9
授業の中で出された問いに対して、必ず自分なりに考えて答えを出し、ノートに書き留めたり友達と答えを共有したりする。	19.8	22.3
【地歴公民】基礎的な知識をもとにしながら、社会的な見方・考え方を身に付けていこう。		
考査や小テストで間違えた問いは、人に説明できるまで徹底した復習に努める。	52.8	56.1
ニュースや社会的課題について日頃から関心を持ち、周囲と話題にするように努める。	32.6	34.3
レポート提出や記述が求められる場面では自分の考えを根拠を添えて、表現するように努める。	21.1	17.8
意見交換の場では、自らの意見を言うだけでなく、他者の意見にも耳を傾けようと努める。	24.5	23.7
授業を通して生じる疑問や問いをまずは自らの力で解決しようと努める。	27.7	30.8
【数学】数学の学習を通して、数学的に思考し、判断し、表現する力を身に付けよう。		
なぜそうなるのかを、根拠をもって判断している。	55.4	56.4
これまでに学習した内容と関連づけて、問題を解こうとしている。	58.7	61.1
違う解き方がないか、複数の解法を考えたり、比較したりしている。	18.0	19.7
【理科】理科の学習を通して学んだことを、新しい発見に繋げよう。		
なぜそうなるのかを考えながら授業を聞いている。	40.7	44.3
学習した内容が、身近な例や、新しい科学技術に活かされていることをイメージするようにしている。	21.8	21.1
学習した内容について、復習している（教科書・ノートを見直している）。	46.6	45.7
学習した内容について、演習に取り組んでいる（課題などに積極的に取り組んでいる）。	20.2	20.8
これまでに学習した内容と関連づけて、問題を解こうとしている。	20.8	25.7
分からないところを友達や先生などに聞いて、そのままにしないようにしている。	28.4	26.8
ペア活動やグループ活動における対話を通し、表現力を身に付けている。	18.3	16.9
実験・観察を通し、自分の考えを書いたり、発表したりして表現している。	9.4	8.3
実験・観察・話し合いの目的を理解しようとしている（結果からわかることを、自分で考えようとする）。	9.1	11.0
【英語】自分の考えを表現できるように思考力・判断力・表現力の向上を目指そう。		
教科書で学んだ表現を使って、自己紹介や学校生活の紹介を書いたり発表したりする。	29.0	29.7
教科書で学んだ表現を使って、日常的な話題について、やり取りをする。	38.6	38.5
ペア活動やプレゼンテーション活動を通し、表現力を身に付ける。	37.4	34.5
既習事項を自分なりにまとめ、それを他者に分かりやすく伝える。	16.3	15.5
本文内容に関する話題について、学習した語句などを用いて、自分の意見を話したり書いたりする。	26.2	23.4
読んだ内容を要約して相手に伝える。	22.9	28.1
さまざまなトピックについて考え、話して伝えたり、まとまりのある文章で書く。	15.1	18.2

3 自己評価アンケート②（学習の振り返りアンケート）

資料5は1学期の学習内容の定着と、目標設定の効果に関する生徒の自己評価の結果である。

「目標を意識できた」は約60%、「目標を立てた効果はあった」は約70%という結果が出ているが、学習内容が定着していない生徒や、学習に向かう意欲がそもそも低い生徒の割合の高さが非常に目立つ。この状況を今後どのように改善していくか、大きな課題である。

資料5 学習の振り返りアンケート結果（R6との比較）

	(%)	
	R 6.8	R 7.7
1 1学期の学習内容（高校入学～現在までの学習内容）で定着していない（覚えていない・理解できていない）ことがありますか。		
ある	88.3	92.5
ない	11.7	7.5
2 学習内容定着のために、夏季休業中にどのような取組をすればいいと思いますか（複数選択可）。		
①教科書の見直しをする	30.1	44.9
②授業のノートや学習プリントの見直しや解き直しをする	27.3	60.5
③問題集（授業で使用しているもの、休日課題帳）等の見直しや解き直しをする	34.3	65.9
④新しい問題集を自分で購入し取り組む	9.3	12.4
⑤定着していない内容（暗記不足・理解不足・大事な内容等）を自分なりにノートにまとめる	9.5	46.6
⑥塾に通う	5.6	6.0
⑦友達（先輩・後輩・同級生問わず）と教え合う	17.9	44.2
⑧学習アプリを使用したり動画視聴（Classi学習コンテンツ「学習トレーニング」等）したりする	8.6	27.0
⑨特に何もしない	11.4	0.3

	R 6.10	R 7.2	R 7.7
3 目標を意識して学習（授業や自宅学習）に取り組むことができましたか。			
全くできなかった	2.7	1.6	2.7
できないことの方が多かった	46.1	41.8	34.9
できることが多かった	45.2	49.2	54.9
よくできた	6.0	7.4	7.6
4 3で「全くできなかった」「できないことの方が多かった」と回答した人に聞きます。なぜ「できなかった」のですか。			
学習する必要がある（学習することに意義を見いだせない）から	1.3	0.6	2.1
やってもできないから	3.4	1.8	6.6
部活動など学習以外のことを優先させたから	51.0	46.1	43.7
怪我や病気、悩み（人間関係や家庭のことなど）があったから	5.4	6.1	4.2
特に理由はなく怠けていたから	35.2	43.0	42.7
その他	3.7	2.4	0.7
5 3で「できることが多かった」「よくできた」と回答した人に聞きます。目標を立て意識して学習したことで、振り返り（単元テスト）や考査の結果はどうでしたか。			
目標を立てて取り組んでも、目標を立てない時と変わらないもしくは悪い結果だった	23.2	21.1	25.8
目標を立てて取り組んだことで、目標を立てない時より結果はよかった	76.8	78.9	74.2

4 自己評価アンケート③（松陽プライド9つの力職員アンケート）

新年度が始まり2ヶ月経ち生徒たちの実態が見えてきた6月に、教員が生徒たちに求める9つの力は何なのか知るためにアンケートを行った。質問は「職員から見て、生徒たちが高校生活を充実させるために身に付ける必要があると考える力（現時点で不足している力）は、9つの力のうちどれだと思いますか。三つ選んでください。」とし、所属学年毎に回答してもらった。

表3 SP9 職員アンケート結果（所属学年比較）

									(%)
1 学年所属職員			2 学年所属職員			3 学年所属職員			
	R 6	R 7		R 6	R 7		R 6	R 7	
①自奏力	46.7	71.4	①自奏力	30.0	73.3	①自奏力	41.2	50.0	
②基礎力	73.3	78.6	②基礎力	80.0	73.3	②基礎力	64.7	50.0	
③分析力	46.7	28.6	③分析力	50.0	40.0	③分析力	29.4	25.0	
④見聞力	13.3	28.6	④見聞力	20.0	26.7	④見聞力	29.4	25.0	
⑤創造力	26.7	14.3	⑤創造力	10.0	33.3	⑤創造力	29.4	0.0	
⑥自彩力	20.0	7.1	⑥自彩力	60.0	33.3	⑥自彩力	17.6	37.5	
⑦連携力	20.0	35.7	⑦連携力	0.0	13.3	⑦連携力	23.5	25.0	
⑧発信力	33.3	42.9	⑧発信力	30.0	33.3	⑧発信力	41.2	62.5	
⑨寄与力	46.7	14.3	⑨寄与力	20.0	13.3	⑨寄与力	23.5	37.5	

表3は所属学年毎の令和6年度と令和7年度の比較である。

全学年、令和6・7年度いずれも「②基礎力」を身に付けさせたいと感じている職員が多いことが分かる。また、「①自奏力」が前年度より高くなっている。このことから、「目標をもっていない生徒」「目標を決めて実行することのできない生徒」が多いと職員が感じていると言える。

次に、「⑧発信力」についても前年度よりも高くなっており、生徒の9つの力アンケートの結果と総合的に見ると、生徒職員共に発信力向上の必要性を感じているということが分かる。

表4 SP9 職員アンケート結果（2・3学年への生徒への評価の変化）

現2学年生徒に対する評価の変化			現3学年生徒に対する評価の変化		
	R 6 1年次	R 7 2年次		R 6 2年次	R 7 3年次
①自奏力	46.7	73.3	①自奏力	30.0	50.0
②基礎力	73.3	73.3	②基礎力	80.0	50.0
③分析力	46.7	40.0	③分析力	50.0	25.0
④見聞力	13.3	26.7	④見聞力	20.0	25.0
⑤創造力	26.7	33.3	⑤創造力	10.0	0.0
⑥自彩力	20.0	33.3	⑥自彩力	60.0	37.5
⑦連携力	20.0	13.3	⑦連携力	0.0	25.0
⑧発信力	33.3	33.3	⑧発信力	30.0	62.5
⑨寄与力	46.7	13.3	⑨寄与力	20.0	37.5

表4は現2・3学年生徒を担当する職員に係る令和6年度との結果の比較である。

2学年の生徒については、前年度同様「②基礎力」の向上を望む割合が73.3%と高い。また、「①自奏力」については約30%近く割合が高くなっており、「1年の時よりも、もっと真剣に目標を決め取り組んでほしい。」という職員の思いが強いのではと考えた。「⑨寄与力」の減少については、上記の分析内容と併せると、「自分の進路実現に向けて、まずは目標設定と学力向上が最優先」という考えが伺える。

3学年の生徒については、「②基礎力」の減少と「⑧発信力」の

倍加が目立つ。各自の基礎力の向上より、授業等での生徒の発信力の低さに目が向きやすい状況があるものと考えられる。

5 職員研修

各教科の取組や指導にあたり抱えている困難を共有し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「思考力・判断力・表現力を身に付ける取組み」の一助とするため、8月に職員研修を行った。全職員を対象とし、「同教科での情報交換・情報共有→他教科との情報交換・情報共有」というジグソー的進め方をしたことで、より幅広い情報の共有と多角的な視点の交換を行うことができた。

各教科から挙げられた内容と、研修をとおして見えてきた今後の学校全体の課題は以下のとおりである。

各教科から

(1) 国語科

ア 「質問力」の育成

読解 → 「自分の問い」を立て → 発表・共有
書く力・表現力との連動

イ 他教科の問いづくり活動と連動

(2) 地歴公民科

ア 教科横断的な学びの推進

「問いの立て方・説明の仕方」向上のための、理科や国語との連携

イ ディベート型学習

倫理的・社会的テーマでのディベート → A I を活用した根拠資料の検討

(3) 数学科

ア 小テスト・リフレクションの効果的活用

短いサイクルでの「やればできる」実感の提供

イ 学びの応用力育成

習得した知識を他教科とつなげる仕組みづくり

(4) 理科

ア 探究活動の深化

A I 活用を含めた生徒主体のテーマ設定と発表

イ 「クイズ・問答」形式の導入

学びの定着と興味喚起の仕組みづくり

(5) 英語科

ア 多様なレベル別教材の選択制

1枚教材で複数パターンを提示することによる個別最適化

イ 「書く力」の習慣化

I C Tを活用し、短い英文をアウトプット

ウ 協働的音読・ペアワークの質向上

関係性・注意力の差を考慮したグループ編成法の工夫

(6) 芸術科・保健体育科・家庭科

ア 個別最適な実技活動 + 協働的な講評

イ 自己評価 + 相互評価を言語化する活動

ウ 適性を行かした活動の可視化

エ 才能の発見を共有する仕組み

見えてきた今後の学校全体の課題

ア 学習の基本サイクル（基本の型）の統一

例) 「個別探究（自分で考える）→ 協働交流（仲間と議論）→ 最個別化（自分の学びに落とし込む）」というプロセスを単元のまとまりもしくは1単位時間で共通化する。

イ 学習活動カードやルーブリックの共通化

例) 生徒が自身の活動が見通せるように「学び方」を意識できるキーワード（生徒から募集。「どの活動が個別か」「どこで協働活動を行うか」「まずは一人で」「みんなで深めて」「最後は自分のものに」等）を共通化する。

ウ ICT活用のルール化

例) 個別：タブレットでの調べ学習・AIドリル・自己チェック
協働：共有ドキュメント・ロイロノート・ジャムボード等での意見交換

エ 授業の振り返り（自己評価）シートの共通化

例) 教師の評価の規準にするとともに、生徒自身が思考力、判断力、表現力を意識して活動できるように評価項目を予め提示する。

オ AI×探究的学びの推進

例) 各教科AIを教材・補助として活用しつつ、生徒が裏取り・検証する活動を組み込む。
AIに出させた賛否を基にディベート → 出典確認・自己の意見形成

カ 問いを立てる力の育成

例) 「授業冒頭に生徒が問いを立てる」活動の導入 → 「質問する力」を評価対象とする。

6 振り返りの工夫①（振り返り〈自己評価〉シートの作成）

職員研修をとおして、「思考力・判断力・表現力を向上させる手立てとして、教師・生徒ともに明確な評価項目を意識しながら活動した方が活動が充実するのではないか」という課題が見えてきた。

そこで、授業の「振り返り〈自己評価〉シート」（資料6）を作成し、必要に応じて各授業で活用していくことにした。作成するにあたり、まず①生徒が個別に学んだこと、協働で学んだこと、次に生かせることを振り返ることができるようにする、②思考力・判断力・表現力それぞれの力がどのような活動（姿勢）であれば評価できるのか明確にする、ということを重視した。

活用については、活動前に評価項目を予め生徒に確認させ、活動後自己評価させることが効果的だと考えられる。また、全教科、全授業で活用しなければならないといった強制的なものではなく、実施するタイミングや評価させる項目の取捨選択は教科担任の判断で自由にできるものと位置づけた。

この振り返り〈自己評価〉シートは、実態に応じて改訂を加えながら、活用していく。

資料6 振り返り〈自己評価〉シート

振り返り〈自己評価〉シート			
() 年 () 組 () 番 氏名 ()			
科目名 []			
【単元名・教材名・分野名】			
学習をとおして学んだこと・ 身に付いたこと・気付いたこと等	仲間との協働的活動で学んだこと・ 効果的だったこと等	次の学習（他教科の学習）につなげたいこと	
* 思考力・判断力・表現力の向上を意識した取り組みができたか自己評価しよう。			
A：よくできた B：どちらかと言えばできた C：できなかった			
思考力	a 問い・疑問に対し、知識を活用しながら自分なりに b 結論の予想を立て、論理的に c 情報を整理して自分なりに考えをまとめるために d 問題解決に向けて、多面的・多角的な視点で e 問題を設定し、解決までの取り組みの構想を立てて f 一つの課題について、深く掘り下げて g 学習した内容の本質や、他の事項との関連性について h 得た情報を適切に用いて i 得た情報を分析し、重要なポイントについて j 他者の意見の理解に向けて	思考することが できた。	A B C
判断力	a 問題解決に向けて、どのような知識を用いればいいか b 問題解決に向けて、どのような活動が効果的か c 学習活動において、自分がどのような立場で取り組めばいいか d 得た情報をもとに適切な結論を e 他者の意見を聞いて、その内容が適切なものか	判断することが できた。	
表現力 ※1	a 思考したことを自分なりにノートをまとめたり、解答を導いたり、感想を書いたりする等 b 他者の意見を聞き、その内容を自分で分かりやすく言葉で c 相手に伝わるように、自分なりに言葉遣いや内容の工夫をして意見を	表現することが できた。 発表することができた。	

※1 「表現力」は、「思考すること」「判断すること」が土台となります。

先生方へ

この様式をそのまま使用して該当する項目のみ評価するという使い方も、文言例として評価の参考にするという使い方も構いません。各授業の評価の一助としてご利用ください。

7 振り返りの工夫②（アンケート回答のアドレス収集）

昨年度複数回アンケートを実施したが、実施に当たっての問題点として「アンケートの回数が多く時間の確保が難しい。」「アンケートを実施しても生徒は自分がどう回答したか覚えていないため、前回の内容を次に生かせない。」などが挙げられた。研究を進める上で、生徒の実態把握や意識付けにアンケートの実施は効果的だと考えられるため、実施に関しては目的を明確にし、アンケート内容も精選しながら今後も継続していきたいと考えている。

問題点の二つ目については、生徒が自分の回答を確認し日頃の活動に生かしたり、前回の回答と比較をして自分の変化に目を向けたりすることができるようにするにはどうすればよいか係で検討した。紙媒体でアンケート回答を保管するという手段や、回答データをひとつのシートにまとめて蓄積していくようなシステム構築も考えたが、保管の難しさやシステム作成の難しさから断念した。結果として、アドレス収集することでアンケート回答をメールで確認できる、というGoogleフォームの機能を有効にしてアンケートを実施することにした（図6）。

教室掲示

アンケート回答時のメールアドレス収集について

アンケート回答に関するお願いです。

今年度、あと数回生徒対象のアンケートを実施する予定です。
2学期最初のアンケートは「9月9つの力アンケート」です。

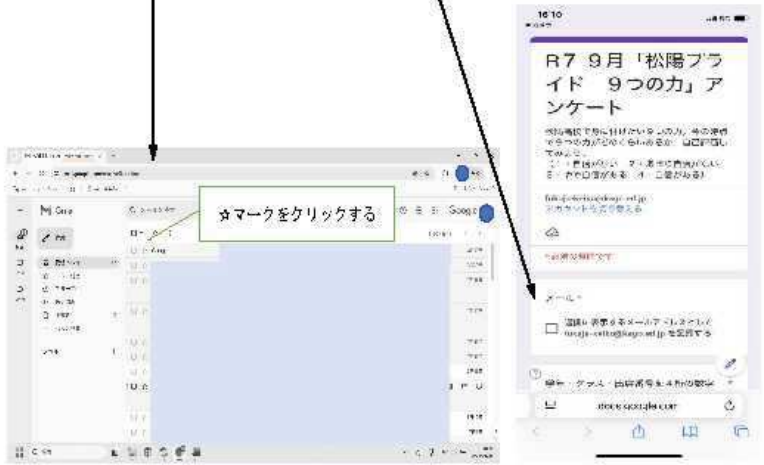
つきましては、今まではメールアドレスは収集せずにアンケートを実施していましたが、今回（9月9つの力アンケート）より、メールアドレスを収集したいと考えています。

目的は、回答内容を各自確認し、学校生活をよいものにするきっかけにしたいからです。

以下の手順に従い回答してください。よろしくお願いします。

【手順】

- ① 教室掲示されるQRコードを読み取り、アンケートフォームに進む。
※ 「〇〇〇@kago.ed.jp」のアカウントでアンケートに回答するようにする。
- ② 「返信に表示されるメールアドレスとして〇〇〇@kago.ed.jpを記録する」という表示が出るので、☑する。
- ③ 質問項目に答え、「送信」する。
- ④ 回答を送信すると、②で記録したアドレスに、回答結果メールが送信されてくるので、自分の回答がいつでも確認しやすくなるように、そのメールの「☆」マークをクリックする。



↑こうすることで・・・
例えば、9月アンケートの回答内容を参照した上で次回の「2月9つの力アンケート」を回答する、ということができます。

図6 アドレス収集に関する依頼

8 自己評価アンケート④（思考力・判断力・表現力に関するアンケート）

各教科における思考力・判断力・表現力に関する意識調査や評価とは別に、係としてアンケートを取り、生徒たちが思考力・判断力・表現力をどう捉えているか把握し、今後の研究に役立てることにした。

表5 思考力・判断力・表現力に関するアンケート結果

(%)

		思考力		判断力		表現力	
身 に 付 か い て	全く身に付いていない	0.5		1.1		1.3	
	あまり身に付いていない	12.0		12.0		20.5	
	少し身に付いている	68.1	87.5	53.7	86.9	48.7	78.2
	しっかりと身に付いている	19.4		33.2		29.5	
活 動 に 取 り 組 ん で い る か	全く取り組んでいない	2.1		1.4		2.4	
	あまり取り組んでいない	26.6		19.7		18.6	
	少し取り組んでいる	52.2	71.3	50.0	78.8	48.0	79.0
	しっかりと取り組んでいる	19.1		28.8		31.0	

「身に付いている」「意識して取り組んでいる」という回答に着目して分析できるようにまとめたものが表5である。

まず、「力が身に付いているか」という質問に対して、思考力・判断力は約87%，その二つの力と比較すると僅かに低いものの表現力も約80%近くの生徒が「身に付いている」と回答しており、総じて自己評価が高いと言える。

次に、「意識して活動に取り組んでいるか」という質問では、「取り組んでいる」と回答している生徒が、思考力約71%，判断力・表現力は約79%であった。中でも、「表現力」に「しっかりと取り組んでいる」生徒が31%に対し、「あまり身に付いていない」と感じる生徒の20.5%の差異が有意に認められる。

これらのことから、表現する活動に主体的に取り組んでいるが、活動をとおして表現力が身に付いたと実感できていない状況が読み取れる。

続いて、「思考力・判断力・表現力を身に付ける上で効果的だと思う活動（または活動への取り組み方）の具体例」を尋ねた質問の自由記述を分析（次頁表6）したところ、生徒がどのような活動に効果を感じているかについて、いくつかの傾向が見られた。なお、次頁図7は、記述のキーワードをテキストマイニングによって整理し、「力が身に付いたと感じている生徒」に共通する取組の特徴を明らかにしたものである。

まず、全体的な特徴として、多くの生徒が「思考力」「判断力」「表現力」を個別の力としてではなく、「思考し、判断し、表現する」という一連の流れとして捉えており、総合的に伸ばす必要があると感じていることが分かった。

次に、内容を分類すると、最も多かったのは「協働的に取り組む活動」に関する回答であった。具体的には、「グループで意見を出し合う話し合い活動」「ディスカッションを通じて自分の考えを整理する」などが多く見られた。

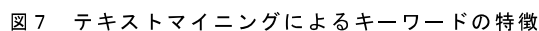
次に、「個人で深く考える活動」（例：「一人で課題にじっくり取り組む」「自分の考えをまとめてから発表する」）や、「個人で考えた後に協働する活動」（例：「個人で調べてから班で意見を出し合う」）が挙げられた。

また、「疑問をもつこと」を意識する回答も多く、「なぜそうなるのか」「他の方法はないか」といった問いを自ら立てる姿勢が、思考の出発点として重要であると感じている様子が見ええた。

さらに、多くの生徒が「読書」に触れており、知識の習得とともに思考力・判断力・表現力の向上を実感していることが分かる。

分析結果を職員間で共有し、指導方法や学習活動の改善に生かしていく。

「協働」を重視する意見
ディベート・ディスカッション・意見交換・話し合い・教え合い
周りの人の話を聞く。
人の意見を尊重する。
自分の意見をまとめ、しっかりと具体的に相手に伝える。
人の前で発表する。
グループで情報や意見を共有する。
グループ活動の中で案を考えて、その案で大丈夫か判断し、みんなに発表する。
授業の終わりに隣の人同士でその日の授業の内容を教え合う。
多くの人とコミュニケーションをとり、相手の話をよく聞き、自分の意見を相手に伝える。
一つの問題に対して違う意見の人とコミュニケーションをとる。
「個」を重視する意見
周りに頼らずまず自分でしっかりと考えて、自分の考えを自分の言葉で表現する。
自分一人の力で解決する機会をもつ。
ネットや友達、解答に頼らず、まずは自分で答えを出す。
「個→協働」を重視する意見
人に聞く前に一度自分の力で考えてから、周りの人と話すようにする。
相手に何か説明する前に、自分の考えをノートに書き出して簡潔にまとめておく。
グループ内で積極的に自分の考えを発言し、周りの人と考えを深め、様々な方向から物事を見ていく。
疑問をもつことを重視する意見
疑問に思ったことをすぐに調べる。
なぜそうなるのか疑問をもちながら活動する。
「なぜ」を追究する。
読書を重視する意見
読書により、知識や語彙を増やす。
読書をして感想文を書いたり要約したりする。
その他の意見
音楽の演奏や美術の創作といった専門の活動
部活動・ボランティア活動・学校行事
活動の取り組み方として多かったキーワード
「主体的に」「自主的に」「積極的に」「意識的に」「集中して」「興味をもって」
「まずは自分で」「しっかりと考えて」



Ⅸ 成果と課題

本研究2年目にあたる今年度は、昨年度からの継続アンケートに加え、「思考力・判断力・表現力」に新たに焦点を当てたアンケート調査を実施した。「力ごとの意識と定着」に関する分析からは、思考力・判断力・表現力を協働的な話し合いや発表、探究的な活動や読書などをとおして高めようとする生徒の意識が見られた。このことは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が相互に補い合う関係を、生徒自身が実感し始めていることを示している。

また、生徒個人の意識や取組の変容をより継続的に把握できるように、自己の回答を振り返ることのできる「積み立て型」にしたことも大きな成果と言える。自らの成長を意識化したり、自己の思考や判断を支えるツールとして活用したりできるようになったことで、学習活動の改善にもつながりつつある。

さらに、職員研修においては教科の枠を越えて実践を共有し、相互に助言し合う風土が芽生えた。特に、各教科でのICT活用例や、主体的・対話的で深い学びの実践事例をもち寄ることにより、具体的な授業改善につながる知見が蓄積されたことは、本研究の進展を支える大きな成果である。

一方で、「表現力の育成」に資するICTの活用方法や、生徒の学びを可視化して次の指導に生かす仕組みについては、今後さらなる検討と実践が求められる。

今後は、授業実践の中で得られた具体例を収集・分析し、効果的なICT活用を含む授業モデルを構築するとともに、「松陽プライド9つの力」と各教科の資質・能力の育成を関連づけながら、個別最適な学びと協働的な学びが一体となった「生徒一人ひとりの深い学び」の実現を目指したい。

〈参考文献〉

- 奈須正裕（2017）『「資質・能力」と学びのメカニズム』株式会社東洋館出版社
- 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』
- 西川純（2019）『人生100年時代を生き抜く子を育てる！ 個別最適化の教育』学陽書房
- 『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』令和3年1月26日 中央教育審議会
(2024年5月7日閲覧)
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
- 『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』（令和3年3月版）文部科学省初等中等教育局教育課程課
(2024年10月5日閲覧)
https://www.mext.go.jp/content/20210428-mxt_kyoiku01-00014639_13.pdf
- 増田謙太郎（2022）『学びのユニバーサルデザインと個別最適な学び』明治図書出版株式会社
- 奈須正裕（2022）『個別最適な学びの足場を組む。』株式会社教育開発研究所
- 西村陽介（2022）『デジタル×アナログ 学びのハイブリッドデザイン』明治図書出版株式会社
- 佐々木潤（2022）『個別最適な学び×協働的な学び×ICT入門』明治図書出版株式会社
- 堂徳将人（2023）『高等学校 ICT活用で実現する 個別最適な学び・協働的な学び』学事出版株式会社

研究公開の分科会における授業研究の流れ

0 背景

昨今県では、学び続ける教職員集団を目指す授業研究として、廣瀬氏^{*}（2019）による Instructional Rounds（インストラクショナル・ラウンズ）の考え方を取り入れ、「子供の学びの姿」に着目した授業研究が行われている。

廣瀬氏は、IRは「学校や教室をつなぎ、訪問者が授業やその研究を通して学び合うことに理論の焦点がある」と述べている。

IRのシステムの特徴の一つに「授業観察はインストラクショナル・コア（Instructional Core）」である、教職員・子供・内容とその相互作用に焦点が置かれる」というものがあり、展開された子供の活動と教職員の言動、学習内容の相互作用に注目し、記述・分析することとしている。

^{*} 廣瀬真琴
（鹿児島大学 法文教育学域教育学系 教育学研究科 学校教育実践高度化専攻 准教授）

1 研究授業～分科会の流れ

	主な流れ・実施上の留意点
全 体 会	(1)【情報を確認する】全体会の最後、必要に応じて各教科で実施 各教科研究開発係もしくは公開授業担当者が説明 ・ 学校の実践上の課題は何か（＝学校レベルで解決に取り組みたいこと） ・ 目指している生徒の姿は何か。（＝課題が解決されたと考える生徒の姿） ・ 生徒の姿へのアプローチ（行動の論理）は何か（＝解決策の見通し） ※ その他、学校で取り組んでいることや課題、授業者の思いや願い、悩みなど ○ 授業参観する際どの生徒を中心に観察するか、参加者は割り振りを確認しておく。 →「2 授業観察について」参照
公 開 授 業	(2)【公開授業を観察し、観察記録シート（別紙「観察記録シート・分科会模造紙様式」参照）に記録する】 ○ 授業観察は、<u>授業の中核</u>（Instructional Core）に注目し、記録する。 「授業の中核」とは ・ 生徒の言ったことや行ったことの実事 ・ 教師が言ったことや行ったことの実事 ・ 学習課題や活動内容の実事 ※ 使用してはいけないNG表現 「～だったと思う」（感想）、「○○のように見えた」（曖昧） 「先生はAすべきだったのに…」・「非常にすばらしいことに…」（価値判断） 「楽しそうに…」（印象や解釈） ※ 観察時の注意事項 ・ 教室の後方に留まらず、観察しやすい場所に移動する。 ・ 自分が割り当てられた生徒の様子を中心に観察する。
	【分科会の最初】以下、参加者（本校職員も含む）はグループに分かれる。 ・ 開会の挨拶、分科会の進め方に関する説明 ・ 授業者の振り返り ・ 各グループ自己紹介

分 科 会	(3)【観察記録を確認する（事実の確認）】 ① 授業の記録（データ）を、観察ワークシートから選び、付箋に書き起こす。 （色分け） 黄色：生徒 緑色：教師 ※ 付箋の内容が推測になっていないか？ ※ 評価的（価値判断的）になっていないか？ ② グループ内で、模造紙（左側）（別紙「観察記録シート・分科会模造紙様式」参照）に時系列で付箋を貼って、観察結果を共有する。
	(4)【データの整理・分析をする】 ① 生徒の姿を記した黄色の付箋に、「目指している生徒の姿」に迫ることができていた姿（○）と迫ることができていなかった姿（△）の記号を加筆する。 ② 迫ることができていた生徒の姿（○）のみを模造紙（右側）の「迫れていた姿の付箋」の方に動かし互いの見取りを共有した後、類型化（適切な名前づけ）する。 例）「○○と書いていた」「××と伝えていた」などの生徒の姿の付箋 →類型化（名前づけ）例：「Aの関係について思考・表現」 ③ 迫ることができていた背景に関連する教師の姿を記した緑色の付箋を、②で類型化した付箋の周囲に貼り、互いの見取りを共有した後、類型化（適切な名前づけ）する。 例：「課題設定の手順」、「学習のルール」 ④ 迫ることができていなかった生徒の姿（△）を模造紙（右側）の「迫れていなかった姿の付箋」の方に動かし互いの見取りを共有した後、類型化（適切な名前づけ）する。 例）「何をするの？」「ノート写させて」などの生徒の姿の付箋 →類型化（名前づけ）例：「目的をつかめていなかった」「ぐっと我慢」 ※ 必要に応じて線で付箋をつないだり、図形化したりする。
	(5)【子供の立場に立って考え推測する】 ○ 感情面も含めて生徒になりきり、以下の問いについて考え話し合う。 Q1 もし自分が生徒だったら、今日何が分かり、できるようになっただろうか。 Q2 何を必要としただろうか。 ※ 感情面も含めて生徒になりきり、必要な手立てや支援、配慮について、直接的な声かけや発問といった指導や、環境設定といった間接的な指導等まで含めて考える。
	(6)【協議を踏まえて今後の展望を考える】 ○ (1)～(5)の活動を踏まえ、今後の指導にむけたアイデア等を出し合う。 ※ 研究の視点に沿って、意見交換を進めてください。 ※ 生徒の姿を具体的に取り上げ、その様子を各自がどのように見取ったのかを共有しながら、互いの教育的鑑識眼を磨き合ひましょう。 ※ 互いの解釈やアイデアを共有しながら、各自の実践に関わる引き出しを増やしましょう。 ※ 目指す姿に迫るために、今後、何をどうすればよいかを、生徒の視点から考えましょう。
	(7)【各グループの意見を発表する】 ○ 代表者が各グループの活動の内容等を発表する。 → 授業者の今後の取組へのヒントとなります。

	※ 授業者は、今後の取組に生かしてください。
	○ 鹿児島県総合教育センター（研究主事）より ○ 閉会の挨拶

2 授業観察について

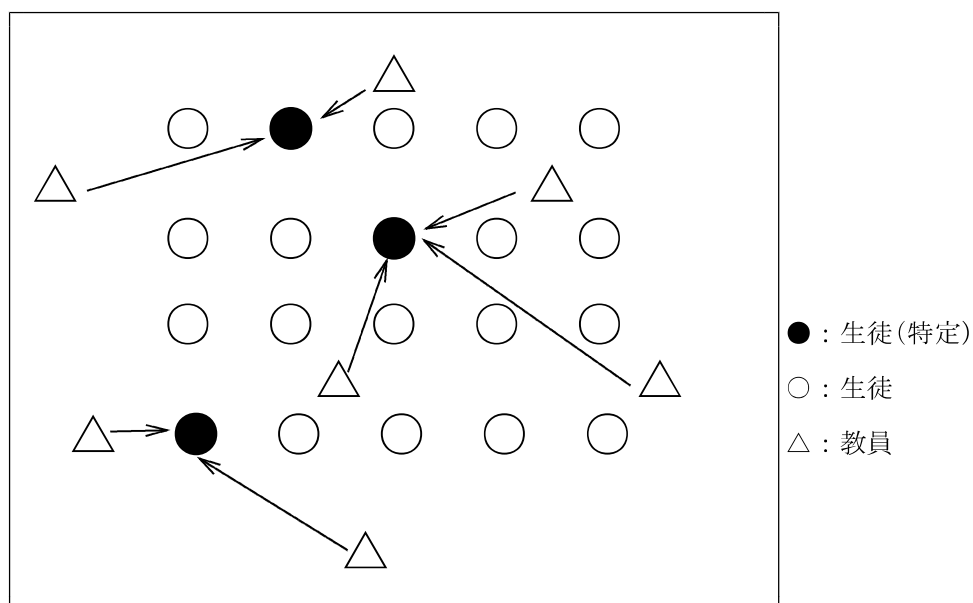
事前に、授業参観する際どの生徒を観察するか、教室のどこにいる生徒なのか、誰がどの生徒を観察するのかなどを確認しておく。

観察する生徒は、原則次の三つのタイプの異なる生徒が選ばれています。

- 〈例〉
- ① 身に付けさせたい資質・能力が十分に身に付いている生徒
（その科目を得意とする生徒、成績がよい生徒、日頃から意欲的に取り組んでいる生徒等）
 - ② 身に付けさせたい資質・能力が概ね身に付いている生徒
（得意ではないが不得意でもない生徒、成績が中間層の生徒、取り組み方が悪くはない生徒等）
 - ③ 身に付けさせたい資質・能力がこれから大きく伸びるであろう生徒
（その科目が不得意な生徒、成績が悪い生徒、授業を受ける姿勢があまりよくない生徒等） など

グループ活動の場合、観察対象生徒がいるグループ・いないグループがあると思います。観察する際に、教室内で極端に偏った場所に参加者がまとまることないように配慮してください。

（例）



S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

単元デザイン

教科・科目	国語・論理国語	学科・コース	普通科																																				
単元名	社会的な話題に関する文章を読み、自ら問いを立て、批判的視点で意見文を書こう。 教材名:多木浩二『消費されるスポーツ』																																						
単元目標	(1) 主張と論拠など情報と情報との関係について理解することができる。 [知識及び技能](2) ア (2) 立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定して、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫することができる。 [思考力、判断力、表現力等]A (1) ウ (3) 文章の構成や展開、表現の仕方などについて、自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言を踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることができる。 [思考力、判断力、表現力等]A (1) カ (4) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯をわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。「学びに向かう力、人間性等」																																						
課題	社会的な話題に関する文章を読み、自ら問いを立て、批判的視点で意見文を書く。 (本単元における「批判的に読まれることを想定し、相互評価を通して、効果的な文章の構成や論理の展開を考える」言語活動)																																						
単元の中心となる問い	社会的な話題に関する文章を読み、自ら問いを立て、批判的な視点で意見文を書くために、どのように探究し、どのように表現すればよいか。																																						
評価規準 (B段階)	<table><tr><th colspan="4">知識・技能</th><th colspan="4">思考・判断・表現</th><th colspan="4">主体的に学習に取り組む態度</th></tr><tr><td colspan="4">○主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。(2)ア</td><td colspan="4">○「書くこと」において立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定しながら、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫している。(A「書くこと」(1)ウ) ○「書くこと」において文章の構成や展開、表現の仕方などについて、自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言を踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりしている。(A「書くこと」(1)カ)</td><td colspan="4">○短い論文を書くことを通して、情報と情報との関係を理解し、読み手を説得できるように情報を収集し、文章の構成や表現を粘り強く工夫し推敲を重ねながら、自らの学習を調整しようとしている。</td></tr><tr><td colspan="4">SP9基分</td><td colspan="4">SP9見創連</td><td colspan="4">SP9発</td></tr></table>			知識・技能				思考・判断・表現				主体的に学習に取り組む態度				○主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。(2)ア				○「書くこと」において立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定しながら、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫している。(A「書くこと」(1)ウ) ○「書くこと」において文章の構成や展開、表現の仕方などについて、自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言を踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりしている。(A「書くこと」(1)カ)				○短い論文を書くことを通して、情報と情報との関係を理解し、読み手を説得できるように情報を収集し、文章の構成や表現を粘り強く工夫し推敲を重ねながら、自らの学習を調整しようとしている。				SP9基分				SP9見創連				SP9発			
知識・技能				思考・判断・表現				主体的に学習に取り組む態度																															
○主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。(2)ア				○「書くこと」において立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定しながら、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫している。(A「書くこと」(1)ウ) ○「書くこと」において文章の構成や展開、表現の仕方などについて、自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言を踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりしている。(A「書くこと」(1)カ)				○短い論文を書くことを通して、情報と情報との関係を理解し、読み手を説得できるように情報を収集し、文章の構成や表現を粘り強く工夫し推敲を重ねながら、自らの学習を調整しようとしている。																															
SP9基分				SP9見創連				SP9発																															
評価場面・評価方法	<table><tr><th colspan="4">知識・技能</th><th colspan="4">思考・判断・表現</th><th colspan="4">主体的に学習に取り組む態度</th></tr><tr><td colspan="4">○定期考査 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認)</td><td colspan="4">○定期考査 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認)</td><td colspan="4">○言語活動 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認) ○「ふりかえりシート」の確認</td></tr></table>			知識・技能				思考・判断・表現				主体的に学習に取り組む態度				○定期考査 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認)				○定期考査 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認)				○言語活動 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認) ○「ふりかえりシート」の確認															
知識・技能				思考・判断・表現				主体的に学習に取り組む態度																															
○定期考査 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認)				○定期考査 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認)				○言語活動 ○パフォーマンス課題(ワークシート(記述)の確認) ○「ふりかえりシート」の確認																															
単元の指導計画	時	学習活動	指導と評価の観点																																				
			知	思	態	SP9																																	
	1	本文の概略及び構成を把握する。	○			分析力																																	
	2	第一段落から「大衆消費社会」とスポーツとの関係を理解する。	○			基礎力																																	
	3	第二・三段落から、スポーツと各メディアの関係をつかむ。	○			基礎力																																	
	4	「スポーツと社会のあり方」についてスポーツ経験者の話を聞き、質問する。		○	○	創造力																																	
	5	第四段落から筆者がスポーツを通して「社会」をどのように捉えているかを理解する。	◎	○		見聞力																																	
	6	これまでまとめてきた問いを振り返り、意見文を書くための構成を考える。		○		分析力																																	
	7	自ら立てた問いとそれに対する自分の考えを他者と共有し、批判的視点で意見を述べ、それらを踏まえて自分の考えを再構築する。(本時)		○	◎	創造力																																	
	8	社会的な話題について書かれた文章を読み、自ら立てた問いについて意見文を800字程度で書く。		◎	○	発信力																																	

※本時の実際は裏面にあります。

S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

授業デザイン

日時		令和7年11月7日（金）6限目	指導者	浦上 美香
学級		2年1組	場所	2年1組教室
単元名		社会的な話題に関する文章を読み、自ら問いを立て、批判的視点で意見文を書こう。 教材名:多木浩二『消費されるスポーツ』		
課題		社会的な話題に関する文章を読み、自ら問いを立て、批判的視点で意見文を書く。 (本単元における「批判的に読まれることを想定し、相互評価を通して、効果的な文章の構成や論理の展開を考える」言語活動)		
本時の 実際	過程	主な学習活動	資質・能力の育成の工夫	SP9
	導入 (5分)	1 本時の目標と流れを確認する。 2 前回まとめた自分の意見文を読み直す。 3 今日のグループ発表のフォーマットを確認する。	1 本時の流れをタブレットやモニターで表示し、学習活動内容や展開を理解させる。 2 意見文のワークシートを確認させ、さらに発表を円滑に進めるために、発表のフォーマットを確認させる。	基礎力
	展開 (42分)	1【グループ活動】（20分） 4人グループを作り、 自分の意見文を読む（2分） 意見交換・感想を述べる（2分） 評価カード記入（1分）」の発表を行う。 2【発表】（10分） グループの中から1名発表者を決め、発表する。 3【個別の活動】（8分） もらった意見を自分の意見文に赤ペンで書き込む。 次回の意見文作成に向けて、新たな構成表を作成する。 4【意見交換】（4分） 2人組で、次の意見文構成表について説明し合い、意見文の流れや根拠の妥当性を確認する。	1 フォーマットを参考に円滑に発表を進めさせ、自分の意見文の根拠の妥当性を確かめさせる。 2 批判的な視点で読み取ることで、より説得力が増す意見が構築できることを確かめさせる。 3 他者と対話し、共有することで自分の意見の理解が深まることを確認させる。	創造力 連携力
	まとめ (3分)	1 本時の振り返り 2 次回の予告	1 本時の振り返りをワークシートに記入させる。 2 ワークシートを用いて、これまでの学習の中で培ってきた「よい問いとは何か」を再度確認させる。	分析力

S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

単元デザイン

教科・科目	歴史総合	学科・コース	芸術科・美術コース										
単元名	第2部 第2章 第2節 経済危機と第二次世界大戦												
単元目標	知識・技能 ・世界恐慌が世界の国々に与えた影響および各国がどのように対応したかを理解する。 ・ファシズムや日本の軍部台頭により第二次世界大戦が勃発したことを理解する。 思考力・判断力・表現力 ・世界恐慌が世界の国々に与えた影響および各国がどのように対応したかを表現する。 ・ファシズムや日本の軍部台頭により第二次世界大戦が勃発したことを表現する。												
課題	各国がとった対応策が適切ではなかったのではないかという批判的視点をもって考察し、根拠を示して説明する。												
単元の中心となる問い	なぜ第一次世界大戦後の国際協調体制は崩壊し、第二次世界大戦へと突き進んだのか。												
評価規準 (B段階)	知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度									
	・本時の学習内容を適切に理解し、語句等の確認を適切に行っている。 ・資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能を身につけている。		・事象の背景や原因、結果や影響などに着目し、アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けを行ったりするなどして、主題について多面的・多角的に考察し、表現している。	・設定された課題解決のために主体的に取り組んでいる。									
	SP9	基	分		見	創	発	奏		創	奏		
評価場面・ 評価方法	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度								
	・振り返りテスト ・定期考査 ・授業ノート		・振り返りテスト ・定期考査 ・授業ノート ・授業課題レポート ・プレゼンテーション		・言語活動 ・授業課題レポート								
単元の 指導計画	時	学習活動			指導と評価の観点								
		知	思	態	SP9								
	1	世界恐慌【本時】			○	○	◎	基礎力 創造力 連携力					
	2	ファシズム・軍部の台頭			○	○		基礎力 創造力 連携力					
	3	ファシズムの対外侵略と国際秩序の変化			○	○		基礎力 創造力 連携力					
	4	日中戦争の開始と戦時体制下の日本			○	○		基礎力 創造力 連携力					
	5	第二次世界大戦			○	○		基礎力 創造力 連携力					
	6	まとめ・資料整理 7			◎	◎	○	基礎力 創造力 連携力					

S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

授業デザイン

日時		令和7年11月7日（金）6限目	指導者	和田淳義
学級		美術科1年8組	場所	1年8組教室
単元名		第2部 第2章 第2節 経済危機と第二次世界大戦		
課題		「誰一人取り残さない近代社会を築くには」という第2部を通観する問いの下，「2度の世界大戦を防ぐことができなかったのはなぜだろうか」という問いを立て，世界恐慌への対応について，アメリカ，イギリス・フランス，ソ連，日本それぞれの恐慌対策について，批判的視点をもって考察し，根拠を示して説明する。		
本時の 実際	過程	主な学習活動	資質・能力の育成の工夫	SP9
	導入 (10分)	1 前時の学習内容を内容を振り返り，本時の課題について確認する。 2 教科書の内容を確認するとともに，予習してきた総合ノートの内容と照らし合わせ，不明な語句のチェックを行う。	・前節の問いからの課題を受けて本時の問いを共有できるように，指導者の補足説明を行う。 ・不明な語句を共有し，内容の理解および知識の定着を図る。	基礎力 分析力
	展開 (35分)	1 アメリカ，イギリス・フランス，ソ連，日本について，それぞれの国が行った恐慌対策について，なぜその国はそのような対策（対応）をしたのか，担当を決めて(前時)まとめる。 2 班を編成し，それぞれ班内で各自の意見を発表する。また，各班毎に意見集約を行って，班としての意見をまとめ，ロイロノートの提出箱に提出する。 3 提出した内容について，共有画面を活用して各班の代表によるプレゼンテーションを行う。プレゼンを聴きながら，問いに対する考察を進める。	・それぞれの国の当時の状況（市場・資源確保など）を踏まえて考えさせる。特に，前章で確認した帝国主義の拡大も考慮するように指示をして，各自でプレゼン用のスライドの作成を促す。 ・プレゼンに用いる様式(スライド)を予め配信しておく。 ・共有ノート画面で各班のプレゼン内容を確認しつつ，必要に応じて補足等の形成的評価を行う。	基礎力 分析力 発信力 連携力 創造力 寄与力 発信力
	振り返り (5分)	1 各班の発表を踏まえ，どの国の対策が最も多くの国民を取り残した恐慌対策であったと考えられるかを提出用スライドに記入し，最後に「問い」に帯する回答を記入する。	・タブレット上で提出用スライドを作成させ，ロイロノートの提出箱に提出させる。	発信力

S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

単元デザイン

教科・科目	数学・数学Ⅱ	学科・コース	普通科2年・理科コース		
単元名	数学Ⅱ 第6章 微分法と積分法 第3節 積分法				
単元目標	・不定積分及び定積分の意味について理解し、関数の定数倍、和及び差の不定積分や定積分の値を求めることができる。 ・微分と積分の関係に着目し、積分の考え方をを用いて直線や関数のグラフで囲まれた図形の面積を求める方法について考察できる。				
課題	放物線とx軸で囲まれた部分の面積（教科書 p. 217 研究）について、放物線とx軸の共有点のx座標の差と囲まれた面積に関係性はないか考察する。				
単元の中心となる問い	放物線とx軸の共有点のx座標の差と囲まれた面積に関係性はないか				
評価規準 (B段階)	知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
	・不定積分を微分と関連付け求めることができる。 ・定積分の計算ができる。		・定積分と微分を関連付ける事ができる。 ・直線や関数のグラフで囲まれた図形の面積を定積分で立式し、求める事ができる。	・関数の上下関係や上端下端に該当する値を図形を描きながら立式し、求めることができる。	
	SP9	基奏連	SP9 連分創	SP9 分創	
評価場面・ 評価方法	知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
	定期考査 単元テスト		定期考査 単元テスト パフォーマンス課題	学習における言語活動 ノート，ICT機器の活用 パフォーマンス課題	
単元の 指導計画	時	学習活動		指導と評価の観点	
				知	思 態 SP9
	1	導関数と不定積分		◎	基礎力
	2	不定積分の性質		○	自奏力
	3	定積分		◎	基礎力
	4	定積分の性質		○	自奏力
	5	定積分と微分法		○ ○	連携力
	6	定積分の図形的な意味		◎	分析力
	8	2つの曲線の間の面積		○ ◎	分析力
9	放物線とx軸で囲まれた部分の面積（本時）		◎ ◎	創造力	

SSTP (Shoyo Simple Teaching Plan)

授業デザイン

日時		令和7年11月7日（金）6限目		指導者		大西 真之	
学級		2年5組		場所		教室（2年5組）	
単元名		数学Ⅱ 第6章 微分法と積分法 第3節 積分法					
課題		放物線とx軸で囲まれた部分の面積（教科書 p.217 研究）について、放物線とx軸の共有点のx座標の差と囲まれた面積に関係性はないか考察する。					
本時の 実際	過程	主な学習活動		資質・能力の育成の工夫		SP9	
	導入 (10分)	・ 面積を求める復習 ① $y=(x-1)(x-2)$ とx軸で囲まれる面積の求め方を確認する。 ・ $\beta-\alpha$ が同じ値となる場合、 $y=(x-\alpha)(x-\beta)$ とx軸で囲まれる面積は、一致することを図形から理解する。 ・ 放物線とx軸で囲まれた部分の面積をテーマにすることを理解する。		・ 立式の方法を確認させる。（基礎力、自奏力） ※算出できた者は、計算結果をクラスルームに入力させる。 ・ 「DESMOS」を利用して、視覚で理解させる。（分析力）		基礎力 分析力	
	展開1 (10分)	・ ② $y=(x-1)(x-3)$ とx軸で囲まれる面積は、①の何倍程度になっているか、計算ではなく、描かれた図形から推察する。 ・ 数グループで意見交歓し、まとめる。 ・ 「WolframAlpha」を利用し、計算する。		・ 3～6名のグループに分かれて、意見交換をし、まとめた値をクラスルームに入力させる。（創造力、連携力） ・ 「DESMOS」を利用して、視覚で理解させる。（分析力）定積分計算は利用しない。 ・ グループ内の意見交換内容を発表させる。（発信力） ・ 「WolframAlpha」を利用させる。		創造力 連携力 発信力	
	展開2 (10分)	・ ③ $y=(x-1)(x-4)$ とx軸で囲まれる面積は、①の何倍になっているか、「WolframAlpha」を利用して計算する。 ・ 面積の値を分母が6で通分し、共有点のx座標の差と面積の値の関係性を考察する。		・ 「DESMOS」で確認させ、計算結果から、何倍になっているか求めさせる。（基礎力） ・ 通分して倍率を求めているグループがあれば、とりあげる。 ・ グループで意見交換をし、意見をまとめクラスルームに入力する。（分析力、連携力）		基礎力 分析力 連携力	
	展開3 (10分)	・ 数列的に考えると共有点のx座標の差が4のとき、同様な面積がどうなるか考える。 ・ ④ $y=x^2-2x+1$ と $y=x-1$ で囲まれる面積と①はどちらが大きいか考える。		・ グループで意見交換をし、意見をまとめクラスルームに入力する。（分析力、連携力） ・ 「1/6の公式」を伝える。 ・ 「DESMOS」で確認させ、推察させる。（寄与力） ・ 立式をさせ、「1/6の公式」が使えることを気づかせ、放物線と直線で囲まれた面積でも利用可能であることを伝える。		分析力 連携力 寄与力	
	まとめ (10分)	・ 放物線とx軸（直線）で囲まれる面積は、共有点のx座標の差の3乗と関係があることを確認する。 ・ 「1/6の公式」の演習をする。		・ x軸（直線）と放物線で囲まれる面積は、共有点のx座標の差の3乗と関係があることを確認させる。（寄与力） ・ 本時の授業の振り返りをさせる。（分析力）		分析力 寄与力	

S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

単元デザイン

教科・科目	理科・生物	学科・コース	普通科・理科コース								
単元名	遺伝子の変化と進化のしくみ										
単元目標	・遺伝子の変化と進化の仕組みに関する観察、実験などを通して、遺伝子の変化、遺伝子の組合せの変化、進化の仕組みについて理解し、それらの観察、実験などの技能を身に付ける。 ・遺伝子の変化に関する資料や実験結果に基づいて分析し、遺伝子頻度に変化する要因や関係性を見いだして表現する。 ・進化の仕組みに関する観察、実験などに主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度を養う。										
課題	生物の進化には様々な事象が要因となっています。進化とは一体何なのでしょう。また、地球上における生物の進化にはどういった要因が関係していて、どのような仕組みで起きているのでしょうか。そして、「進化とは、“生き残りやすくなること”」なのでしょう。										
単元の中心となる問い	遺伝子頻度の変化が起こるには、どのような要因があるのか。										
評価規準 (B段階)	知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度							
	遺伝子頻度の変化と進化の仕組みについての基本的な概念や原理・法則などを理解しているとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付けている。		進化の仕組みに関する観察、実験などを行い、資料や実験結果を分析し、進化とは何か、また遺伝子頻度に変化する要因について関係性を見いだして表現する。	進化の仕組みに関する観察、実験などに主体的に関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど科学的に探究しようとしている。							
	SP9	基		SP9	分	創	発	SP9	連		
評価場面・ 評価方法	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度						
	・小テスト ・振り返りテスト ・定期考査		・パフォーマンス課題 ・実験レポート ・振り返りテスト ・定期考査		・パフォーマンス課題 ・グループ活動 ・課題の取り組み状況						
単元の 指導計画	時	学習活動						指導と評価の観点			
								知	思	態	SP9
	1	多様な遺伝的変異をもたらす有性生殖						○			基礎力
	2	遺伝の法則（対立形質、分離・独立の法則、検定交雑）						○			基礎力
	3	遺伝の法則（減数分裂）						○	○		基礎力
	4	遺伝子の連鎖と独立、組み換え						○			基礎力
	5	自然選択による進化、適応進化							○	◎	創造力
	6	遺伝子プールと遺伝子頻度						◎	○		基礎力
	7	自然選択、遺伝的浮動による遺伝子頻度の変化（本時）							◎	○	分析力
8	ハーディー・ワインベルグの法則							○		分析力	

S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

授業デザイン

日時		令和7年11月7日（金）6限目		指導者		池田大悟	
学級		2年4組（27名）		場所		生物室	
単元名		遺伝子の変化と進化のしくみ					
課題		生物の進化には様々な事象が要因となっています。進化とは一体何なのでしょう。また、地球上における生物の進化にはどういった要因が関係していて、どのような仕組みで起きているのでしょうか。そして、「進化とは、“生き残りやすくなること”」なのでしょう。					
本時の 実際	過程	主な学習活動		資質・能力の育成の工夫		SP9	
	導入 (10分)	・前時の復習をする。 ・問いに対する解答をする（個人活動） 【Work 1】 1. 進化とは何か。 2. 進化とは，“生き残りやすくなること”なのか。 ・本時の課題を確認する。 ・思考・判断・表現の観点での評価基準を共有する。 「科学的根拠に基づき説明するとはどういうことか」を意識し、思考、表現の質を高める。		・前時に学習した自然選択と遺伝的浮動の知識を想起させる。 ・生徒のもつ「進化＝強くなる・良くなる」という直感を起点に，“本当にそう言えるのか。”という探究課題を生み出す。 ・生徒の直感的な意見を拾い、あえて多様な見解を残しておく。 その際、感覚的な発想も含めた、生徒の直感的理解を出発点として、後の実験結果や考察を通して、科学的根拠に基づく考え方へと転換させる。		創造力	
	展開 (25分)	【Work 2】 ・グループごとにモデル実験を行い、①自然選択と②遺伝的浮動による遺伝子頻度の変化を観察・記録する。（グループ活動） ・前時の学習を基に、それぞれの実験が自然選択、遺伝的浮動のどれが要因となっているか確認する。（グループ活動） ・ICTを用いて班ごとの結果を入力し、全体で共有・比較する。（全体） 【Work 3】 ・実験結果を基に、自然選択と遺伝的浮動という二つの進化要因を比較し、整理する。導入の問いを再度、問い直しそれぞれの現象との関連を、根拠をもって説明し合う。		・「この変化は環境に適応している？偶然？」と問いかけ、生徒が①と②の両側面から結果を考察するよう促す。「進化の要因は一つではない」ことに気づき、自らの観察結果やデータを基に、科学的根拠をもって説明しようとする思考を引き出す。 ・協働的な活動を通して、グラフを作成・分析させ、データの傾向を多面的に捉え、丁寧に考察するよう促す。 ・各班を回り、考察（思考の内容）の根拠を問い直す。授業開始時の直感的理解を見直し、「生き残りやすくなること＝進化」と単純に言えないことに気付かせ、科学的・論理的な思考へと促す。		分析力	
	まとめ (15分)	・各班や個人の意見を発表、共有し、全体で比較・検討する。導入時の問いへの解答と比較する。 ・発展的な問い「人間は今も進化していると言えるか？」を考え、本時を振り返る。 ・ルーブリックを用いて自己評価を行う。		・実験や考察を通してどのように理解を深め、思考を変化させたかを可視化する。科学的知識を基に考えを整理し、根拠を伴った説明に進化させる過程を確認できるよう振り返りをさせる。 ・本時で学んだ知識を基に、科学的根拠を示しながら自分の考えを述べさせる。		発信力	

S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

単元デザイン

教科・科目	外国語・コミュニケーション英語Ⅲ	学科・コース	普通科				
単元名	LESSON 13 Crowdfunding						
単元目標	・クラウドファンディングがどのようなものかを知る。 ・高校生がおこなったクラウドファンディングについて情報収集し、相手に伝えることができる。 ・クラウドファンディングで実現したいことを考えて英語で伝えようとする、または他者が作った英作文を読んで、理解しようとする。						
課題	クラウドファンディングで実現したいことを考え、アピールする。						
単元の中心となる問い	どんなことを実現するためにクラウドファンディングが使えるか。						
評価規準 (B段階)	知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度			
	・クラウドファンディングがどのようなものかを概ね理解している。 ・人にアピールする時に使う表現を一つ以上使用している。		・クラウドファンディングが活用できる例を自分で考え、英語で伝えることができる。 ・他者が書いた英文を読んで、その内容を概ね理解することができる。	・自分がもっている情報を相手に伝えようとしている。 ・他者が書いた英文を読んで、その内容を理解しようとしている。			
	SP9	基奏	SP9	発分	SP9	見連	
評価場面・ 評価方法	知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度			
	定期テスト 単元テスト パフォーマンス課題		言語活動 定期テスト パフォーマンス課題	言語活動 パフォーマンス課題			
単元の 指導計画	時	学習活動		指導と評価の観点			
				知	思	態	SP9
	1	pre-reading活動，語彙の確認		○			基礎力 自奏力
	2	本文の内容理解①		○			基礎力 自奏力
	3	本文の内容理解②		○			基礎力・自奏力 発信力・分析力
	4	クラウドファンディングの例についての理解と英文作成		○		○	基礎力・自奏力 発信力・分析力
	5	クラウドファンディング案の英文の推敲と共有《本時》		○	◎	○	基礎力・自奏力 発信力・分析力
	6						
	7						
	8						

S S T P (Shoyo Simple Teaching Plan)

授業デザイン

日時		令和7年11月7日（金）6限目	指導者	福田 智行
学級		3年3組	場所	3年3組教室
単元名		LESSON 13 Crowdfunding		
課題		クラウドファンディングで実現したいことを考え、協力を得られるようアピールする英文を作る。		
本時の実際	過程	主な学習活動	資質・能力の育成の工夫	SP9
	導入 (10分)	1. small talk 2. 本時の目標の確認	"If a very rich man would give you money, how much would you like to have?"という問いに対して、自分がほしい金額を答える。 その後、質問を追加する。 『クラウドファンディングで実現したいことを考えて、アピール文を作成すること』が本時の目標だと伝える。	基礎力 見聞力
	展開 (35分)	3. アピール文作成の注意点の確認 4. アピール文の推敲 5. アピール文の提出 6. 他の人が作ったアピール文をいくつか読んでみる 7. 感想を言い合う	アピール文に含む情報の確認と、聞き手にアピールする時に便利な表現の確認。 翻訳アプリ使用に関するルールの確認。 隣の人に読んでもらい、わかりにくい点や難しい点がないか確認する。その後、修正が必要な場合は修正を加える。 ロイロノートで英文を打ち込んで提出 他の人が作った英文を読んで情報をワークシートで整理しながら、自分が気に入ったアイデアがどれかを考える。 自分が気に入った作品とその理由をペアで話す。	基礎力 分析力
	まとめ (5分)	8. まとめ	数名を指名して、感想を発表して共有する。その後、各自で今日の活動を振り返る。	